



うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第26号

発行日：平成19年3月31日
編集発行：魚津埋没林博物館
印刷：魚津印刷(株)

ハマグリの気、龍の気



当館の広報誌には珍しく、今回の表紙は見事な焼き物2点です。それぞれ、ハマグリと龍が吹き出した気の中の楼閣、すなわち蜃気楼が描かれています。どちらも江戸時代の末に近い19世紀前半の作で、左上は珠洲（現石川県珠洲市）の正院焼「色絵蜃気楼図大平鉢」（珠洲市立珠洲焼資料館蔵、直径44.3cm）、右下が大聖寺（現石川県加賀市）の九谷焼「吉田屋窯龍宮図大平鉢」（石川県九谷焼美術館蔵、直径41.2cm）です。ハマグリと龍とは似ても似つかない生き物ですが、どちらも蜃気楼を作る生き物とされています。なぜそうなったのか、ちょっとした謎を追ってみました。

蜃気楼の“蜃”ってなんだ？

学芸員 石須秀知

今年もまた、蜃気楼の季節がやってきました。さて、この蜃気楼という言葉ですが、歴史をひも解けば、2000年以上の昔までさかのぼります。紀元前の中国で、司馬遷がまとめた『史記』のうち『天官書』の中に、「海旁蜃氣象楼台」という記述があり、これが蜃気楼の語源とされています。この一節は、「海旁(海のそば)の蜃の気は楼台(高い建物)を象る」といった意味になります。では、“蜃”とは、一体何のことでしょう。史記の記述にはその説明はありません。

一般に、蜃気楼の蜃とは大ハマグリのことだとされています。その一方、蜃は蛟という龍の仲間であるともいわれます。ハマグリと龍とではずいぶんちがいますが、なぜこの2種類の説があるのでしょうか。それを探るには、蜃気楼という言葉のふるさと、中国の古文書を調べる必要があります。

昔、中国では、本草書という医薬に用いられるさまざまな材料を解説した本が盛んに作られました。新しい本草書を作るときには、それ以前の本草書や各種の書物を参考に、内容がどんどん付け加えられていきました。それら本草書の中で最も有名で、日本にも多く輸入されたのが、明時代の李時珍がまとめ、1596年に刊行された『本草綱目』で、全52巻の中に1892種もの薬種が収録されています。そして、この『本草綱目』の中に、蜃という生き物は2種類紹介されています。

ひとつは貝類の「車螯」の項に出てくる蜃で、大型のハマグリ仲間です(ここからの文中では“貝の蜃”と表現します)。もうひとつは、龍類の「蛟龍」の項に出てくる蜃です(ここか

らの文中では“龍の蜃”と表現します)。そこに書いてある内容を見ると、どちらの項目にも、お互いに名は同じだが別物であるという注意書きがあります。ところが、どちらにも「気を吐いて楼台を現す」という意味のことが書かれています。このことから、もともとは貝の蜃か龍の蜃かどちらか一方だけが蜃気楼の蜃だったのが、名前が同じために混同されて、両方とも蜃気楼の蜃になってしまったと考えられます。この混同がいつごろ起きたのかはわかりませんが、『本草綱目』



本草綱目の記述

以前のある時点で誤解をそのままに書きとめた書物が作られ、その後次々と引用されてきたのではないのでしょうか。今、手元の資料で推理できることはここまでです。ただ、どちらにしても蜃が蜃気楼を作り出すというのは想像の世界の話なので、どちらも正解としておいてよいのかもしれない。

このようなわけで、本家の中国でも混同されたまま日本に2種類の蜃が入ってきたのですが、一般的には大ハマグリの方がはるかに知名度が高くなっています。大ハマグリの気と楼閣を組み合わせたデザインは、江戸時代以降の日本で美術工芸などの分野で幅広く用いられています。蜃気楼文様、蜃気楼図などと呼ばれるこの絵柄は、よい事の前ぶれを表すめでたい文様として、陶磁器類をはじめ、絵画、着物、袱紗、欄間彫刻、刀の鑲、根付、祭の山車の彫刻や幕、傘鉾などさまざまなものに見られます。



蜃気楼図欄間(石川県輪島市の上時国家)
左下の波間にハマグリ、右上に空中の楼閣

一方、龍の蜃は、表紙の九谷焼の例のほかは、絵画や文様としてはほとんど登場しません。ただ、霊獣の一種として、寺院の銅製品には比較的よく見られ、祭の山車彫刻にも用いられている場合があります。有名なのは、日光東照宮奥社にある銅製の唐門(鑄抜門)に取り付けられた蜃です。また、各地の寺院にある銅製灯籠の蕨手(笠の端の巻き上がったかざり)にししば龍の蜃が付いています。これらの蜃は皆、口から気を吐く形が表現されています。中には、水を吹いたような形にアレンジされているものもありますが、蜃の吐く気はどれも上へ巻き上がっているのが特徴です。



銅製灯籠に付けられた蜃3タイプ
一番上が基本形に近く、下2点はアレンジされている

このように、どちらが本来の蜃であれ、大ハマグリの蜃も龍類の蜃も、ともに日本の文化の中に定着しています。美術館やお寺など、別の目的で行ったときにも、少し注意して見まわしてみると、意外なところに蜃気楼がかくれているかもしれません。

表紙の写真はそれぞれ、珠洲市立珠洲焼資料館と石川県九谷焼美術館からお借りしました。ここにお礼申し上げます。

シリーズ

埋没林の仲間たち ②⑤

アヤメ属(アヤメ科)

アヤメ属は、花が美しいため、多くの園芸植物が栽培されています。代表的なのはヨーロッパ起源のジャーマンアイリスや、日本のハナショウブ(花菖蒲)などです。ハナショウブを作り出す元になっ



ノハナショウブ

た野生種がノハナショウブです。ノハナショウブは、濃い紫色に黄色の斑が入るシンプルながら美しい花を咲かせます。生育地となる湿地が減少したことと、園芸目的の採取とが重なって数が減り、富山県では絶滅

危惧種となっています。

ノハナショウブのほか、日本に自生する代表的

なアヤメ属植物には、アヤメ、ヒメシャガ、シャガ、キショウブ(帰化植物)などがあります。



ヒメシャガ

* * *

現在の魚津市内ではヒメシャガ、シャガ、キショウブが普通に生育し、ノハナショウブはごくまれに湿地で見られます。

魚津埋没林では、平成元年の発掘調査でアヤメ属の花粉が検出されています。湧水地帯だったため、ノハナショウブかもしれません。

お知らせ

●平成19年度の行事予定

☆企画展示

- 魚津ナチュラルギャラリー⑦ ————— 4月30日(月)まで
 蟹気楼写真展 ————— 5月1日(火)～6月30日(土)
 アンタッチャブルな植物 ———— 8月1日(水)～10月31日(水)
 魚津の美しい自然と祭写真展 ————— 11月下旬～12月下旬
 魚津ナチュラルギャラリー⑧ — 1月2日(水)～4月30日(水)

※企画展、学習会の詳細は下記までお問い合わせください。

☆ふれあい学習会

- 食べられる草ど～れだ? ————— 4月28日(土)
 四つ葉のクローバーみ～つけた ———— 5月26日(土)
 魚津周辺のスギと埋没林のルーツ ———— 9月22日(土)
 もみじで楽しく葉書づくり ————— 10月27日(土)
 つるつるつくる ————— 11月24日(土)
 冬の蟹気楼ウォッチング ————— 2月17日(日)

ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)・・・510円 ・小中学生・・・250円
- 交通 ・JR北陸本線 魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分)
- ・富山地方鉄道 新魚津駅 } (徒歩・・・25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765)22-1049

ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/>

e-mail nekkolnd@city.uozu.toyama.jp/

